

\*\*\*\*\*

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 32 2014. 3

\*\*\*\*\*

## 特別寄稿

木原 均先生小伝 ～研究と探検とスポーツと～ ③探検家の顔 木原ゆり子 ----- 1

## 博物館訪問

札幌市資料館 ― 往年の歴史にふれる ― 竹内元信 ----- 4

## 活動報告

タイ国歌のチェンバロ演奏 新妻美紀 ----- 5

イザベラ・バード写真展の開催経緯 大原昌宏 ----- 6

「イトウ」と「ルイス」 ～イザベラ・バードの旅の世界に寄せて～ 久末進一 ----- 7

## 特別寄稿

### 木原 均先生小伝\* ～研究と探検とスポーツと～ ③探検家の顔

木原 ゆり子

#### 山に登らぬ登山家

1920(大正 9)年、父は北海道大学を去って京都に赴いた。北大での恩師郡場寛博士が京都大学理学部植物学教室の教授として京都に赴任され、その助手となったからである。

北大時代、スキーと野球に明け暮れるスポーツマンだった父は、京大でもスキーを続けることになった。郡場博士が京大旅行部の部長だった関係で、スキー班の学生たちの合宿に参加したからである。夏山の経験はなかったが、スキーによる冬山登山は経験を積んでいたもので、冬季登山に興味を持った夏山登山の学生たちとスキーを始めたのだった。

毎年新しい学生が入部して来たが、卒業しても大学内に留まるものが多く、人材は常に豊富だった。集まっていたのは、今西錦司、西堀榮三郎、桑原武夫、四手井綱彦、酒戸弥二郎、平吉 功、加藤泰安、今西寿雄、中尾佐助、吉良竜夫、川喜田二郎、梅棹忠夫、伊藤洋平氏らで、いずれもヒマラヤの登山史、熱帯や極地の探検史に、リーダー・

登山家・探検家として名を残すそうそうたる顔ぶれであった。後に京都大学が「探検大学」と呼ばれるようになったのは、こうした諸氏の活躍のためのものである。

1931(昭和 6)年、旅行部の現役とOBは、ヒマラヤ遠征のための母体組織として京都大学学士山岳会(Academic Alpine Club Kyoto:AACK)を設立し、翌年の総会で父は旅行部長兼会長となった。1951(昭和 26)年には京都大学生物誌研究会(Fauna and Flora Research Society, Kyoto University)も合流して、AACKは登山や探検の歴史に数々の足跡を残したが、未踏の地を拓くだけでなく、新たな学問のフィールドを次々に拓いて行った。

そうした後輩と付き合ううちに、父は登山家の仲間に入ってしまっただが、本人自身は登山をしないので、「山に登らぬ登山家」と称して苦笑していた。

父は、生涯に 5 つの探検に出かけた。内蒙古、カラコルム・ヒンズークシ、シッキム・アッサム、ソ連コーカサス、南米スリナムの 5 か所である。

\* タイトル「木原 均先生小伝」は編集委員会による。写真はすべて木原ゆり子氏所蔵

### 第一の探検（1938）：内蒙古～動植物の生物学的調査～

1938(昭和 13)年夏、京都大学内蒙古調査隊は、学術調査のため内蒙古へ旅立った。隊長木原 均、隊員今西錦司、大井次三郎、平吉 功、間 真之介、釣田正哉、浅井辰郎、周布光兼、金子 茂、宮崎武夫、加藤泰安、畑中政春の各氏。未知の大自然に生物学・地理学・考古学・経済学・医学の各分野から科学のメスを入れるのが目的である。探検の報告は、それぞれが分担して農業植物、気候と水、家畜、森林樹種の分布、医学的に見た衣食住や人口問題の調査、動植物の採集、内外蒙古の探検史を執筆し、平吉氏の優れた写真を数多く挿入して『内蒙古の生物学的調査』（1940 木原 均編、養賢堂）として出版された。

### 第二の探検（1955）：カラコルム・ヒンズークシ～コムギの祖先を尋ねて～

1955(昭和 30)年 5 月、京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊は日本を出発した。氷河と砂漠の果てに走行 3 万キロ、3 か月半に及ぶ戦後初の学術探査行であった。総隊長木原 均、一行 15 名は二つの隊に分れてそれぞれの地を目指した。カラコルム隊は、今西錦司氏を支隊長として医学班の原田直彦、地質学班の松下 進、藤田和夫、植物学班の中尾佐助氏らが加わり、パキスタン北部、氷河のカラコルム山系へ。ヒンズークシ隊は、木原 均隊長、人類学班の岩村 忍、梅棹忠夫、岡崎 敬、山崎 忠、植物班の北村四郎、山下孝介の各氏が、アフガニスタン北部のヒンズークシ山系から砂漠へと向かった。

各隊員にはそれぞれ探検の目的があったが、父の最大の目的は、パンコムギの発祥地を突き止めることにあった。パンコムギとはパンや麺にする小麦のことで、どこでどのようにして生まれたのか起原は不明だったが、父は第二次世界大戦中に実験室で、パンコムギの祖先種のひとつがタルホコムギというコムギに近い野生の植物で、パンコムギはこのタルホコムギとマカロニコムギの雑種として生まれたものであることを明らかにしていた。しかし、実験結果と同じことが自然界でも起こったのかどうか、そして、その場所はどこかを確かめなければならなかった。そこで、山下隊員とともにマカロニコムギとタルホコムギが交雑可



内蒙古探検

能な地域を探してアフガニスタンの南から調査を始め、カスピ海の沿岸、さらにアゼルバイジャンまで足を伸ばした。そして、ついにカスピ海西岸がパンコムギの発祥地であることを突き止め、実験室で出した答えを証明することができたのだった。

なお、その後の探索と研究によって、現在ではパンコムギの発祥地はカスピ海南岸も含まれる。

この探検の記録は、戦後初のカラコルムカラー映画『カラコルム』（1956）として、記録及び色彩映画賞はじめ数々の賞を受賞し、全国の映画館で多くの人々を魅了した。大山脈・氷河・砂漠の雄大な景観の映像は、TVの秘境ブームの先駆となり、その学術的成果は、京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検報告書（英文全 8 巻）として出版された。

### 第三の探検（1966）：シッキム・アッサム～イネの起原を探る～

イネの起原に関する研究には、世界各地のイネを集めることが欠かせない。1959（昭和 34）年、父は中尾佐助氏とともにアジア稲が生まれたシッキムとアッサム両地方を探索し、約 300 種の在来種や野生種を収集した。シッキムでは野生イネの一種が栽培品種の周辺に混生していて、雑種を作っていることも確かめられた。栽培イネの起原に関する意義ある手がかりを得た探検であった。

### 第四の探検（1966）：コーカサス～コムギの起原を求めて～

ソ連コーカサスは、コムギの種類が世界で最も豊富であり、ここにしかない固有種がある憧れの

地であった。1966（昭和 41）年、京都大学コーカサス植物探検調査隊（山下孝介隊長、隊員木原 均、田中正武、阪本寧男各氏）は、コーカサスに向けて出発した。

目的はコムギ類の起原に関する全体像を明らかにする現地調査を実施することにあった。ソ連における採集は制限があつて困難はあつたが、現地の研究機関の惜しみない協力によって、野生の一粒コムギはじめコーカサス固有種など、重要なものはすべて採集することができた探索行であつた。

### 第五の探検（1973）：南米スリナム～カワゴケソウに惹かれて～

カワゴケソウとは、カワゴケソウ科カワゴケソウ属の河川流域の岩などに生育して、開花の翌日に実を結ぶという特異な植物である。これほど急速に成熟する現象は、他の高等植物では考えられないという。父がこの植物を知つたのは、昔、郡場博士がスリナムで見た時の話をされたからであつた。

日本産カワゴケソウの発見者である今村駿一郎博士もまた、学生時代に耳にした郡場先生のカワゴケソウの話が忘れられず、研究を始められたという。

この探検は、今村博士によるカワゴケソウ科植物研究の一環で、開花結実の生理遺伝進化に関する基礎調査と標本と種子の採集を目的として、（財）木原生物学研究所スリナム植物調査隊（隊長山下孝介、隊員木原 均、八田洋章、花島 信の各氏）が行なつた。父は、郡場博士の話は研究心を奮い立たせる示唆に富むものだったと述懐していたが、1973（昭和 48）年、ようやくスリナムに出かけて、カワゴケソウの生態を観察し、標本と種子を採取できたのは、80 歳の時だった。

### チベットへの夢

コムギの研究を続けて 60 有余年、ヒマラヤ山脈の南側は調査したが、父にとってチベットは未踏の地であつた。ここはオオムギやコムギが中国や日本へ渡来する途中に位置しているが、1980 年代当時は、中国以外の国の人は調査できない地域であつた。多くの自然が手を加えられずに残っており、変化に富んだ特性を持つ品種が存在する可能性があつた。



シッキム探検

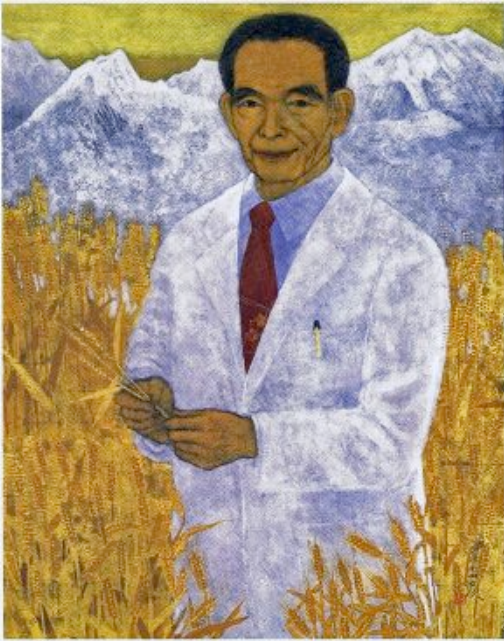


スリナム探検

近代品種がチベットに流入する前に調査しなければ、チベットの自然の状態は失われてしまうだろう。ムギ類だけでなく、イネについても調査する必要がある。予備調査だけでも進めたい。奥地までは行けなくても、せめてラサまで出かけて、隊員からの吉報を待ちたいと、90 歳にしてなお、第六の探検を夢見ている。

父は過去を振り返らない人だった。今したいこと、これからしたいことだけが日々の関心事だった。





滋賀県東近江市横溝町に、南極探検で知られる西堀榮三郎氏の『西堀榮三郎記念探検の殿堂』がある。ここには、「未知の世界に挑んで新発見をもたらした日本の探検家」50名の肖像画が50号の大画面で展示されている。探検家の肖像には、それぞれの探検を物語る背景が描かれており、父は白雪の山を遠景に黄金色の麦畑の中でタルホコムギを手をたたくでいる。

木原先生像 大矢十四彦作  
西堀榮三郎記念探検の殿堂所蔵  
写真でははっきりしないが、木原先生のネクタイには、二人のスキーヤーがシュプールを交差して滑っているデザインがある。

## 博物館訪問

### 札幌市資料館 — 往年の歴史にふれる —

遠友夜学校ボランティア 竹内 元信

第14回博物館押しかけよう会は、師走を控えた2013年11月30日（土）、男女16名が札幌市資料館（中央区大通り西13丁目）に参集した。札幌市資料館ボランティア友の会次長伊庭野薫氏がガイドを担当され、熱心にメモを取る姿も散見された。

第一次大戦後の経済恐慌と政府財政緊縮政策や大正12（1923）年の関東大震災の影響などで予算が削減されたが、大正15年“札幌控訴院”として誕生した。重厚な建物は南区石山の札幌軟石を使った外壁の内側に煉瓦を組み積んで噛み合わせ、間にコンクリートを打ち込む複合構造になっている。

昭和48（1973）年に裁判所合同庁舎が新築されて移転したので、今は札幌市資料館となり、平成9（1997）年に国の登録有形文化財北海道第1号に選ばれた。平成18年全館リニューアルし、内部の法廷展示室を復元し、中・高校生を中心にその他市内各区役所の老人大学、弁護士会、大学法科学学生、市民団体等の模擬裁判所として使用されている。



筆者は集合写真の右から7人目

札幌市の街づくりは、明治2（1869）年の冬、開拓使判の島義勇しまよしただけが雪の円山に登り、京都に倣って図引きをして札幌の都市建設に着手し、明治5年9月に創成川と大通りを中心として市街区域が作られた。創成川は当初“大友堀”と呼ばれ、大友亀太郎が元村を開墾するため幕府の直営農場（御手作場）に水を引くために作ったものである。新渡戸稲造が心血を注いだ遠友夜学校は、明治

27（1894）年に創立され、現在の中央区南4条東4丁目に建てられていたが、昭和19年閉校になり、ここに移された。使用された教科書等々が展示されている。

札幌市資料館は、13～14万人の観光客が毎年訪れている。今回参加した考古ボランティアは、「初めて来たが歴史の重みを感じた。」 また図書ボランティアは、「個人で来た事はあるが、説明を聞いたのは初めて。」 又もう一人は「33年間札幌に住んでいたが、初めてここに来た。開拓者の苦労は私にはよくわかりませんが、ひどかったことでしょう。今日あるのはその人たちの苦労のため物ですね。」 と話された。

館内は、ほかにおおば比呂司記念室（札幌出身、画家・漫画家）もある。

特に遠友夜学校の原書などは、紛失することなく大切に保存されており、当時の夜学生の姿などが目に浮かんだ。刑事法廷展示室は全面的に当時の原型を残し、特に正面の判事席の背面には

「八咫鏡（やたのかがみ）」を模したものが取り付けられており、ここに座すると、当時の雰囲気が出されてくる。大正時代には当時の軟石専門の石工が大勢おり、みんな職人気質で仕事は念入りで、その技術は見事で装飾もすばらしい。



刑事法廷展示室「八咫鏡」

## 活動報告

### タイ国歌のチェンバロ演奏

チェンバロ ボランティア 新妻 美紀

「タイからワニがやってきた！」展示が11月26日から始まり、企画に携わっている阿部先生がチェンバロボランティア担当教員でもあり、オープニングセレモニーで、チェンバロで何か演奏出来ることはないかと、展示が始まる前からお話ししていましたが、阿部先生が急病で、その話もそのままになっていたところ、何時もチェンバロのお世話もしてくださる林さんから、タイの国歌がYouTubeで聴けることを知らされ、早速聴いてみました。

とてもリズムカルな日本人にも親しみのあるメロディーで、チェンバロで弾いても良いかもしれないと思い、楽譜を探して弾いてみました。

チェンバロでも十分お聴かせ出来ると思い、セレモニー前日でしたが、大原先生に提案し、了解



チェンバロでタイ国歌を演奏する筆者

を得て、当日演奏することが出来ました。

タイでは、国歌が流れると、皆起立しなければいけないそうです。

国歌は、その国それぞれの深い意味や象徴されるものですが、今回、このセレモニーでタイの国歌をチェンバロで演奏し、出席された方々にもご紹介出来ました。タイからのお客様もチェンバロと一緒に歌っておられました。もちろん皆様起立です。

この企画展示のオープニングセレモニーで、チェンバロボランティアがお役に立てたことであれば、嬉しいことです。

これからも、ポプラチェンバロを大切に、皆様のお役に立てるボランティアでありたいと思います。

阿部先生がいらっしやれなかったことが残念でした。

---

## イザベラ・バード写真展の開催経緯

北大総合博物館教授 昆虫体系学分野 大原 昌宏

---

北海道大学総合博物館冬期企画展示「ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界写真展」が2014年1月25日から始まり、5月11日まで開催しています。

さて、この展示会が北大総合博物館で開かれることとなった経緯について、すこし記しておきたいと思います。

本展示の監修をされている金坂清則先生は、地理学がご専門で京都大学の名誉教授をされています。2012年10月、私は大学博物館に関するシンポジウムに参加するため、英国のノーリッジへ出かけました。そこで以前からよく存じ上げている京都大学総合博物館の大野照文館長と永益英敏先生と一緒になり、その際に「北大でイザベラバードの写真展を開催しませんか」というお誘いを受けました。京大総合博物館ではすでに2010年に本展示を開催されており、金坂先生の希望もあり、巡回展として「ぜひ北大の博物館でも開催を」というお話でした。たまたま札幌から英国までの飛行機の中で、私はイザベラ・バードの「日本奥地紀行」を読んでおり、この話を聞いた時に「今、読んでます」と手許の本を彼らに見せたのでした。「では決まりですね」とあれよあれよと北大での開催は決まってしまう、2013年の東京大学駒場博物館での開催の後、2014年に北大で本展示を開くことが決まりました。



東大駒場博物館の担当者は、伊藤元巳館長と折茂克哉先生で、伊藤館長とは地球規模生物多様性情報機構 (GBIF) のプロジェクトで以前よりお世話になっていた旧知の仲でした。こちらも知り合いの先生が担当ということで安心をして展示の引き継ぎなどを行うことができました。

2013年4月には、金沢星稜大学の上田卓爾先生から電子メールがあり、ルイス (George Lewis) について教えてほしいという内容でした。ルイスは、私が専門としているエンマムシ (昆虫綱コウチュウ目) の分類学者で、130年程前に日本を訪れ、多くの日本産エンマムシを新種記載した人です。私はルイスの研究を辿る形で現在の日本のエ



ンマムシの分類研究をしているのです。上田先生がルイスについて知りたがった理由は、ルイスが日本に来た時の通訳が、イザベラ・バードの通訳であった「伊藤鶴吉」であり、伊藤について詳しく研究するための情報収集でした。ルイスとバードが繋がっていたとは。私と本展示を繋げる旧知の人物がまた増えました。

2013年夏に金坂先生は本展示打ち合わせのため、札幌を訪れてくださいました。東大の折茂先生も御一緒してくださり、北大での展示にむけて様々な御助言をいただきました。この折、私と私の知り合いとバードと本展示のかかわり合いをお話しし、何かバードが本展示を私に担当するように知り合いを総動員しているかのようだ、人の巡り合わせの奇遇に驚いたものでした。

英国に行く際、私はどうしてバードの「日本奥地紀行」を読もうと思ったのか。うろ覚えで、確かではありませんが、お世話になった植物学者の辻井達一先生が熱心に「イザベラ・バードの道」を現代に復活させようと言われていたことも、バードを読むきっかけだったかもしれません。昨年亡くなられた辻井先生にも、「北大でバード展をやりなさい」と言われている気がします。

バードの日本の旅行の目的地は、蝦夷でした。アイヌに会い、130年前の北海道の風景を綴っています。多くの北海道民は親しみをもってバードを読むことができます。ぜひ読んで、バードと金坂先生の写真をじっくりと鑑賞してもらえればと思います。

---

## 「イトウ」と「ルイス」 ～イザベラ・バードの旅の世界に寄せて～

図書ボランティア 久末 進一

---

「1881年6月9日、木曜日、京都。・・・ロンドンのL氏夫妻が今夜到着した。かねて蝦夷地で数カ月間、昆虫の採集を行なってきた氏が、京都近郊でこれを続行するためである。夫妻はミス・バードの国内旅行に同行したイトウという通訳を連れていた。」

これは金沢星稜大学の上田卓爾氏が指摘する『クロウ 日本内陸紀行』（岡田章雄、武田万里子訳、新異国叢書第11輯10、雄松堂出版、1984年刊）の61ページ11行目の記述である。

同書は1883年にロンドンで出版された英国の「王立地理学協会特別会員」（1882年登録）アーサー・H・クロウ（Arthur H. Crow）の著書『Highways and byeways in Japan: The experiences of two pedestrian tourists, (日本の公道と間道—2人の徒歩旅行者の体験)』の全訳版。今から133年前の1881(明治14)年に来日。日本各地を巡り歩いて、明治の異国日本の風物や名所をつぶさに見聞したクロウが、その約3ヵ月半の旅日記をまとめたもの。彼の生涯唯一の著作ながら、生没年も含



写真-1 ジョージ・ルイス(英、1839-1926)  
(野村・藤野、1992より)

め、経歴には謎が多い。来日時、彼は20代の青年ながら英国人としては上流階級の知識人で、のちに船舶所有の商人として「クロウ・ボガード・ルードルフ商会」経営者となる身分の資産家だった。同行者は友人アーネスト・ビルブローと日本人通

訳「ヨシ（本名不詳）」。

冒頭記述は6月1日横浜到着後、神戸、大阪を経て京都見物のため、円山公園内の安養寺宿坊を改装した「也阿弥ホテル」（井上万吉氏が明治12年開設）に宿泊した時の出来事。偶然にも「ロンドンのL氏夫妻が到着した」というが、このL氏こそ、のちに昆虫学界の世界的権威となったジョージ・ルイス（George Lewis, 1839-1926）である。

ルイスは1839（天保10）年8月15日、ロンドン郊外ブラックヘッドで牧師の子として生まれ、若い頃から昆虫に興味を持つ熱心な蒐集家だった。1862年から茶の取引をする商会の代表者となり、22歳で中国に渡る。商用のかたわら昆虫採集と標本制作を続け、専門家の指導の下、昆虫の同定能力と採集技術、研究論文で卓抜な才能を発揮。昆虫採集のため1867-1872年と1880-1881年の2回、来日しており、ハンミヨウ科、オサムシ科、カミキリムシ科、コガネムシ科の日本産甲虫の新種発見でめざましい成果をあげた。彼の来日前は22種しか知られていなかったカミキリムシ科は合計236種、コガネムシ科やエンマムシ科も多数の新種を記載。日本各地を採集旅行し、後世の研究の基礎となる貴重な標本を遺す。

クロウとの出会いは第2回目の来日の時で、この時、彼は42歳で、妻ジュリアを同伴していた。前年の1880（明治13）年2月17日横浜に渡来。箱根、日光、中禅寺、渡良瀬川流域等で昆虫採集を続け、同年7月9日汽船で函館に来て、七飯や駒ヶ岳周辺で採集。8月3日函館から汽船で小樽を訪れ、札幌には8月5日到着。さらに採集旅行は美々（16日）、苦小牧（17日）、白老（18日）、幌別（19日）、室蘭（21日）と続き、汽船で対岸の森へ渡り、函館に帰る。鉄道開通以前の当時、これは駅逦をたどる不便な旅でもあっただろう。その後、東北各地を巡って横浜で越年。翌1881年は2月には長崎、4月熊本、5月は九州各地を調査する。そして、6月に神戸を経て10日から京都周辺の採集を実施しており、その前夜に也阿弥ホテル到着ということになる。

ルイスの採集旅行はその後も日本全国に及び、11月3日に帰国までにぼう大な標本となる。彼の尽力で特に日本産エンマムシ科の蒐集は顕著で、

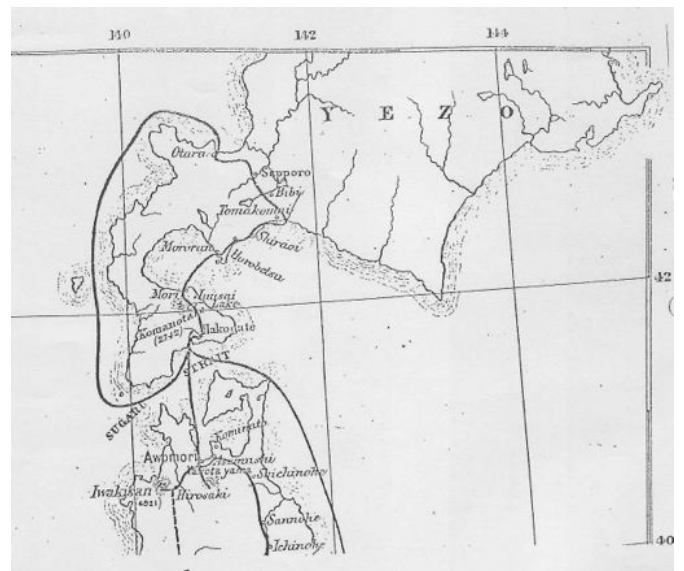


図-1 小樽から札幌へ 1880（明治13）年に来道した際のルイス夫妻の足跡。

「Bibi（美々）」「Tomakomai（苦小牧）」「Siuraoi（白老）」「Horobetsu（幌別）」そして「Mororan（旧室蘭）」の駅逦所在地をたどっている。（草間、1971より）

約7割が彼によって新種として発表されている。他の科や中国、セイロンでの採集標本の合計数は数万点に及ぶが、その多くは大英博物館が収蔵、保管した。1880年、その大英博物館の自然史部門が独立する。これが現在の「自然史博物館（Natural History Museum）」（ロンドン）で、ルイスの実物標本はここに移管、保存されている。

写真-2がその『タイプ（Type）標本』の例で、虫ピンにとめられたラベル記載情報から、ルイスが来日時に採集した日本産『アカツブエンマムシ（*Bacanius niponicus* Lewis）』=背面=である。また、写真-3は「Sapporo」ラベルにあるように1880年8月5日から、ルイスが滞在した札幌で採集した『コアカツブエンマムシ（*Bacanius mikado* Lewis）』=腹面=も収蔵されていた。その学名「*mikado*（ミカド）」には、ルイスの異国日本に寄せる想いがこもっているようだ。

さらにクロウの記述で興味深いのは「バードの通訳イトウ」をルイスが連れていたことである。イザベラ・バード（1831-1904）は英国「王立地理学協会最初の女性特別会員」の榮譽を得た、いわばクロウの先輩であり、クロウは彼女の『日本奥地紀行（Unbeaten Tracks in Japan）』（1880年刊2巻本）も愛読している。バードはルイスより2年前、1878年（明治11）年に来日して8月から9月ま



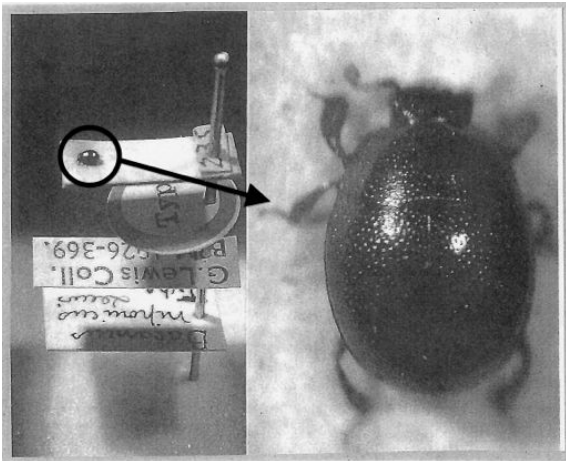


写真-2 ルイスが来日した際に採集した「アカツブエンマムシ」(*Bacanius niponicus* Lewis)。  
標本は英国自然史博物館(Natural History Museum, London)収蔵。(大原教授提供)



写真-3 ルイスが1880年8月5日から16日、札幌で採取した標本「コアカツブエンマムシ」(*Bacanius mikado* Lewis)=*Abraeus mikado* Lewis。  
標本は英国自然史博物館収蔵(Natural History Museum, London)収蔵。(大原教授提供)

で道内旅行した。横浜から函館に来て森から噴火湾を渡って室蘭、そして、平取まで道南をつぶさに見聞するが、日本人通訳「Ito、イトウ」がその旅を助け、彼女の著書内でも度々紹介されていることは、広く知られるところである。9月14日に旅を終えたバードに函館で今生の別れをした後、「イトウ」は英国人植物学者チャールズ・マリーズの通訳となり、その後、ルイス夫妻の通訳として活躍したということか。

本名は伊藤鶴吉。1858年1月31日(安政4年12月17日)－1913(大正2)年1月6日が生没年。相模国三浦郡菊名村(神奈川県三浦市)生まれ。横浜寿町在住の外国人内地旅行案内業「通辯(通訳)」(1877年当時)で、10代で米国公使館や横浜駐留英国軍将校のボーイとして働き、英語に親しむ。横浜に来日したばかりのバードが、ヘボン博士(1815－1911)の邸宅で、博士立会いで通訳兼ガイドの面接試験中、推薦状なしで飛び込み応募。英語力はともかくバードと同等の150センチほどの身長と気転のきく忠実な性格、清潔好きな態度が気に入られて採用された、当時20歳の青年だった。

バードの後、マリーズに雇われ、同様な英国人同士の縁もあってか、ルイス夫妻に雇われていたと考えられる。はっきりしていることは、ルイス夫妻の北海道の旅は通訳「イトウ」の案内で小樽－札幌－苫小牧－室蘭(海路)森－函館を辿り、「バードの道」とは逆廻りである。それは「イト

ウ」にとってバードへの追憶と感傷の旅であったばかりでなく、プロガイドとしての自立の道を歩む旅であった。やがて、彼はガイド組織「開誘舎」を1889(明治22)年設立。1905(明治38)年、米国の鉄道王、エドワード・ヘンリー・ハリマン来日で通訳を務め、米国の鉄道・汽船全ての無料1等乗車券を贈られる。1910(明治43)年にもインドのバローダ藩王国国王を日光に案内するなど、「通辯の元勳」と評される活躍をした。胃癌のため横浜市松影町の自宅で死亡。享年55歳。

バードが見なかった札幌を、「イトウ」はルイスを案内してしっかり見ていた。『がに股ながら頑丈な体躯、のっぺりした丸顔に細い目、重そうに垂れたまぶた』などと、バードが著書で紹介した、その細い目を通じて、「イトウ」はルイスと共に札幌農学校の緑の農場を眺めて歓声をあげたかもしれない。

昆虫学界に名声と大きな功績を遺して、ルイスは1926年9月5日、英国ケント州フォークストーン市の自宅でひっそりと生涯を閉じた。享年87歳。遠慮深い性格だったためか、一般にあまり知られず、子供がなかったためか、子孫はいない。その死から3カ月余り、日本が「昭和」に変わったのは同年12月25日である。

商人として一生を終えたクロウの最後はわからない。1950年代の死亡が推測されている。京都「也阿弥ホテル」は立派な庭園があり、洋風に日本座



写真-4 伊藤鶴吉(1858-1913)  
(ウィキペディア)

敷を改築。石油ランプ照明、各室カーテン仕切り、洋食を供すなど、外国客に喜ばれたが、1906（明治 39）年火災のため焼失した。

今から 133 年前、明治 14（1881）年 6 月 9 日、京都「也阿弥ホテル」という凝縮した時空で、未踏の世界に挑む者たちが交差した。まさにそれは知られざる歴史の中の奇跡の一瞬であった。

[資料提供・教示]

大原昌宏（北大総合博物館教授）

金坂清則（京都大学名誉教授）

[参考文献]

クロウ, A. H. (1882) 日本内陸紀行。岡田章雄・武田万里子訳、雄松堂出版、1984 年。

金坂清則 (2000) イトー、すなわち伊藤鶴吉に関する資料と知見。地域と環境、第 3 号、京都大学大学院人間環境学研究所。

草間慶一 (1971) 「ジョージ・ルイスの足跡について」(上・下)。月刊むし、1971 年 11, 12 月号。

野村全・藤野直也 (1992) GEORGE LEWIS 覚え書き (1)。昆虫学評論。

ウィキペディア

[取材協力] 中井稚佳子、西本結美、星野フサ、山岸博子の皆さん。

(「ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界」写真展は北大総合博物館にて 2014 年 5 月 11 日まで好評開催中)



写真-5 「ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界」写真展会場・北大総合博物館

## 編集後記

札幌は寒い日が続いております。太陽が出ると「光の春」を感じますが、まだ外は肌を刺す風がつかめたいです。こんなシーズンなのにボランティアニュース 32 号の編集にあたって編集委員全員が努力して、印刷まで漕ぎつけました。多謝。

### 北海道大学総合博物館ボランティア ニュース 第 32 号

◆編集人: 北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員: 石川、沼田、星野、山岸、児玉)

◆発行人: 在田一則

◆発行日: 2014 年 3 月 1 日

◆連絡先: 〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011-706-4706

◆ボランティアニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>